

た小腸疾患は65例あり、全手術症例の3.4%となっている。その内訳は腸閉塞症39例、小腸腫瘍4例、潰瘍性病変6例、外傷性損傷14例となっており外傷性損傷が比較的多く認められる。異物性腸閉塞としては、コンニャク、コンブ、魚骨、胆石があり、外傷ではハンドル外傷による空腸の完全離断を呈示した。術前診断については、悪性リンパ腫の穿孔性腹膜炎と結核による腸閉塞は緊急手術が施行されたが、出血性平滑筋腫2例、クローン病3例、回腸末端の腺癌による腸重積はX線の存在診断が可能であった。

小腸病変は上部消化管、大腸疾患に対する除外診断がなされた後、検索されるのが常であり、診断も比較的困難ではあるが、二重造影法が存在診断に非常に有用であった。

26. 当院におけるイレウス手術症例の検討

渡辺 和義, 林 恒男, 田中 精一
上田 哲哉, 竹内 成子, 今里 雅之
塚原 祐二, 金子 篤子, 広瀬はるみ
武雄 康悦 (中山記念病院)

当院において開院以来約5年間でイレウス手術症例は54例あり、内訳は単純イレウス30例、絞扼性イレウス24例であった。そのうち比較的多いとされる3症例を供覧する。

1例目はビルロート2法による再建後に生じた、急性膵炎と鑑別困難であった内ヘルニア症例。2例目は急性虫垂炎と鑑別診断が難しかった大網裂孔への回腸嵌入によるイレウスでこれは文献的にも13例の報告しか見られなかった。3例目は成人になって手術を施行された腸回転異常症I型の1症例である。

以上3症例はまれな症例であるが、当院のイレウス手術症例の原因として手術後の腸管癒着が多く認められた。今後の手術操作の教訓となる症例も多く勉強を続けてゆきたい。

27. 酸素吸入療法が奏効した Pneumatosis coli の1例

野上 厚, 吉井 克己, 野方 尚
飛田 洋一, 原田 昌弘, 尾原 徹司
(尾原病院)

粘血便と下痢を主訴に入院した60歳の女性。腹部X線、注腸造影、大腸内視鏡検査を行いS状結腸に発生したPneumatosis coliと診断した。症例に対しフェイスマスクにより5L/分、5時間/日、2週間の酸素吸入療法を行い、治癒せしめた。

本疾患は、大腸の粘膜下層あるいは漿膜下層に多発

性のガス嚢胞が存在するという臨床稀な疾患である。その発生原因について未だ定説はないが、良性疾患であること、自然治癒もあること、再発の問題などから保存的治療が第一選択と考えられる。今回我々の治験例も含めて、酸素吸入療法は極めて有効であると思われたので、若干の文献的考察を加えて報告する。

28. 大腸マラコプラキアの1例

吉田 裕, 増山 克, 山名 泰夫
(長汐病院)

広瀬 幸子 (順天堂大学医学部第2病院)

マラコプラキアは、病理組織学的に極めて特異的である。すなわち肉眼的には中心に小潰瘍を伴う柔かく黄褐色の結節であり、消化管系では粘膜および粘膜下層に認められる。光顕的には大単核性のマクロファージの集積として見出されその細胞内外に石灰化された封入体、ミハエリス=ガットマン体(以下MG体)として特徴的である。今回我々は、大腸マラコプラキアの症例を経験し、更に電子顕微鏡的検討を行った。その結果、光顕的にPAS染色にて赤染したMG体はライソゾーム内にとりこまれたグリコーゲン顆粒として見出された。その中にミエリン様物質にとり囲まれたグリコーゲン顆粒を認めたが、石灰化された部分は認められなかった。また大腸菌群の残遺物は認められなかった。以上より本症例は、マラコプラキアの局在形の初期段階と思われる。

29. 当院における大腸癌の検討

北畠 滋郎, 島田 幸男, 戸田 智博
南園 義一, 長崎 進

(防府消化器病センター)

近年大腸癌は社会環境、食生活の変化に伴い増加傾向にある。今回我々は昭和43年~62年までの20年間に当院で扱った大腸癌症例347例について、臨床病理的に検討したので報告する。また、このうち昭和42年~57年までの切除166例について、直腸癌と結腸癌に分け5年生存率に及ぼす各因子を比較検討した。

症例数は年々増加しているが、男女比、年齢構成には目立った差はなかった。部位別には直腸癌は170例、結腸癌は204例で、特に直腸癌とS状結腸癌が多かった。肉眼型は限局潰瘍型と浸潤潰瘍型が多く、組織型ではほとんどが分化型腺癌であった。5年生存率は大腸癌全体で42.7%、直腸癌43.5%、結腸癌42.6%で予後に差はなかった。壁深達度、stage分類、Dukes分類と5生率には相関関係があった。

30. 慢性日本住血吸虫症を伴った大腸癌の病理学的

研究

日高 直, 草野 佐, 小沢 俊総
 吉利 彰洋, 吾妻 司, 手塚 秀夫
 葉梨 智子 (社会保険山梨病院)
 小俣 好作 (同病理)

日本住血吸虫症が大腸癌の発生に関与しているか否かを, 当院における大腸癌切除例128例を日本住血吸虫症例, 非日本住血吸虫症例に分けて比較検討した。その結果, 年齢別分布, 占拠部位, 肉眼形態像, 病理組織分類, 予後などの点において両者の間に有意差は認められず, 日本住血吸虫症が大腸癌発生に関与している証拠は見出せなかった。

しかし, 少数ながら日本住血吸虫症に特異的と思われる症例もあり, 今後さらに症例を追加検討していく必要があると思われる。

31. 肝小腫瘍診断に関する2, 3の知見

林 俊之, 御子柴幸男, 糟谷 忍
 平山 芳文, 新井 稔明, 中迫 利明
 平塚 卓 (谷津保険病院消化器外科)
 藤野 信之, 鈴木 義之 (同消化器内科)

近年進歩著しい画像診断法を駆使し, 当院では肝内小腫瘍診断に力を注いでいる。最近2年間では, small liver cancer に対し4例を切除, 15例に局注療法を行い得た。今回, 診断に苦慮した small liver cancer の例, HCC と術前診断を下した nodular hyperplasia の例, 非定型的像を示した cholangio carcinoma の例をそれぞれ呈示し, 以下の知見を報告した。

1) VS およびリビオドールでしか描出されない HCC がある。

2) CT, dynamic CT, angiography, および angiography で HCC のパターンを示す nodular hyperplasia がある。

3) Dynamic CT で hemangioma に類似したパターンを示す cholangio carcinoma がある。

今後, 確実な術前診断のために, VS 下もしくは腹腔鏡下の生検を積極的に行ってゆくつもりである。

32. 腹腔鏡の藪眺み

林 直諒, 進藤 仁, 足立ヒトミ
 春田 郁子 (国立横浜病院消化器科)

我々が経験した腹腔鏡検査例で, 腹膜, 横隔膜病変のうち興味ある症例について述べた。

1) 転移性腹膜癌で肝細胞原発例では, 黄白色調で易出血性かつ球形を呈していた。結腸原発の腹膜癌では, 扁平白色調であったが, 一部のものは嚢胞様で悪性を

思わせる所見に乏しかった。このように腹膜転移では腹膜による修飾も受けるため原因不明の腹膜腫瘍を見た場合, 生検も重要であると思われた。

2) 横隔膜の筋性隆起は比較的頻度の高いものではあるが, 高度のものではそれによる圧痕が生じ, 肝シンチグラムなどで欠損像を示すこともある。

3) 肝鎌状間膜の欠損は稀なものであるが, その程度は様々であった。中程度のものでは腸管を巻き込みイレウスを起こした報告があるが, 高度のものはむしろ臨床的には何事もなく経過すると思われた。

33. 当院における肝切除症例の検討

小形 滋彦, 梁 英樹, 新見 晶子
 栗原 毅, 済陽 高穂, 鈴木 寧
 野村 淑子 (至誠会第2病院消化器科)

1987年5月より12月までの8カ月間に, 我々の経験した肝切除症例は7例である。その内訳は, 肝細胞癌4例, 直腸癌肝転移1例, 肝門部胆管癌1例, 炎症性肝肉芽腫1例である。このうち興味ある症例として46歳女性の炎症性肝肉芽腫の症例と70歳女性の自己免疫性肝炎に合併した肝細胞癌の切除例について詳述した。

34. 肝癌に対する1治験例

木村 健, 平野 宏, 宮川 晋爾
 (宮川病院)

武藤 晴臣 (東京女子医大消化器病センター)

今回, 我々は左葉にも satellite が認められた右葉前区域の肝癌に術前化学塞栓療法を併用した前区域切除術を経験した。術後残存肝の腫瘍の増大が見られ, TAE を施行したが, 一時的には増大を抑えたものの, 最終的には腫瘍の肝管圧排による閉塞性の黄疸で1年3カ月で死亡した。

術中に固有肝動脈に埋め込み型のリザーバーを留置しておくべきだったか, 最初から左葉外側区域も切除しておくべきであったか, 或いは左葉の腫瘍の増大が認められた段階で積極的に外側区域切除に踏み切るべきであったか, また, 術後原因不明の腎不全を併発したが, 日本住血吸虫症との関係は無かったか等幾つかの反省点, 問題点が浮かび上がったため今後のためにもお教え頂きたいと報告した。

35. 胆道鏡を用いた胆嚢結石の摘出

鈴木 浩之, 荻野 佳紀, 中村 集
 平田 清秀 (済生会スズキ病院)
 後町 浩二 (聖マリアンナ医大第2外科)

胆石症の治療法は, 最近の器械および手技などの進